
東方捜真遊 ~ Volost of a true fantasy ~

アイザック

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方捜真遊 〜 Volost of a true fantasy

【Nコード】

N7784P

【作者名】

アイザック

【あらすじ】

突然別世界・・・東方の世界に転移してしまった主人公 嵬人。そして、友人諒助。元の世界とは全然違う世界に戸惑いながらも、元の世界に帰ろうとするが、帰ろうとするうちに幻想郷でトラブルに巻き込まれていく。

独自設定ありで、時代区分は紅魔異変が始まる前です。

オリ主であり、オリキャラが多少出てきます。

また、東方のキャラの口調や性格、幻想郷の世界設定は作者の妄想が多量に含まれています。

「俺はこんな作品でも読んじまう奴なんだぜ？」ってな、良い人おじの方は、これから末永くお付き合いください。

更新は不定期となります。

第1話 始まり（前書き）

この小説は、東方の二次創作の処女作品です。作者は、あらずじでも見てわかる通り文才がなく、また、更新もとても不定期になっています。こんな、作品でもよければ、見ていってくださいm（――）m

第1話 始まり

「・・・嵬人。」

俺を呼ぶ声が聞こえる。恐らくは、俺を起こそうとしている俺の友人だろう。

「・・・え、起きろって」

だが、起きるのを苦手としている俺は、起きたくはない。正直、放課後まで寝ていたい気分だ。故に無視に決め込む。

「・・・嵬人。・・・かゝいと、・・・嵬人ッ」

うぬう、しつこい・・・

何時もならば、こちら辺とで諦めて、午後の授業もふけるのだが・・・

「・・・起きろってば。」

まだ、言うのか・・・

ここまで、されると流石に目は覚めている。

だが、ここで起きるのも、なんだか負けた気がする。

故に、徹底抗戦に決め込む。

「・・・起きろ!!」

ゴチン!!

「イツテエエツ！？」

俺は、頭がカチ割れそうになるくらいの衝撃を受け、とっさに目を開けると、目に飛び込んで来たのは、

「やっと、起きたのかよ。まったく、……起きるまで優しく見守ってた僕に感謝しろよな。」

真つ青な青空をバックに見慣れた俺の親友 樋口諒助ひぐちりょうすけがだった。

「優しく見守ってたって……殴って起こした奴が言うセリフかよ……」

殴られて痛む頭を押さえながら俺は諒助を睨む。

「いやいや、僕は殴ってないよ。ただちよっと手が滑っただけだ。」

そう言っただけ俺にニヤニヤとしたいかにも頭が悪そうな眼鏡面を見せてくる。

正直に言っと……まるで百足が百匹、瓶の中に詰め込まれて蠢いているのを眺めてる気分だ。

ぶっちゃけると、キモイ。

「おい！ 鬼人！！僕はキモくない！！ただ、ちよっと残念なだけだ！！」

「お前、勝手に人の心を読むな。それと、キモいと残念ってあんま違わないだろ……」

俺は何故か胸を張って自信満々にしている諒助に呆れた視線を送く

る。

「・・・はっ！！また自分の事を自分でキモいって言ってしまったのか・・・鬱だ死のう・・・」

そう言つて、地面に”の”の字を書きだす諒助。

何時もの事だから放つておく。しかし、こいつも懲りないよな・・・学習というものをしないのか？

まあ、所詮は諒助の事だ、考えるだけ無駄つて物だろう。まだ、教室に戻つて寝てる方が有意義な時間の使い方つてもんだ、と思い教室に戻ろうと体を起こす。

何時も通りなら、そこには学校の給水タンクがあるはずだった。だが、この日の俺が見たものは、学校に、屋上に決してないものであつた。

「・・・木？」

そして、俺は、異変に気付く。

「ここ・・・何処だ？」

見慣れた学校の屋上から、周りは鬱蒼と木々が生茂つた森に変わつていた。

「????俺つて、確か・・・昼休みに屋上に来て、飯食つて、寝てたよな。屋上で・・・」

そう、俺は諒助と供に何時ものように飯を屋上で食つて、何時ものように昼寝をしたはずだ・・・
なのに、俺は今見知らぬ所にいる。

「ふむ・・・意味不だな。」

「さっきまで、僕たちは確かに学校の屋上で昼寝をしていた。しかし、起きたら学校の屋上から、自然たつぷり森の中にいた・・・というわけさ。嵬人・・・どう思う？」

いつの間にか復活していた諒助が俺にドヤ顔で問いかけてくる。

「いや・・・どう思うも何も、とりあえずここ何処だよ・・・てか、そのドヤ顔やめろ。」

「だが、断る。・・・まあ、学校の近くじゃないことはたしかだね。」

俺たちの学校は東京都のド真ん中にある高校だ。確かにその周りにこんな鬱蒼とした木々が生茂っている場所があるはずがない。

「なあ、諒助。俺達って・・・夢遊病だったわけ？」

「僕の記憶が正しければ、いたって健康そのものだったと思うけど。」

「・・・夢遊病の可能性が高くなったな・・・」

「なんでだよ!？」

「勘違いするなよ、諒助。別にお前を信じれないというわけじゃないんだ。信じれないのは、お前の記憶だ。」

「どっちも、どっちだよ!？」

「だが、安心しろ。俺自身も夢遊病だった記憶はない。これで、お前の記憶が正しかったことが証明されたな。」

「お前何様だよ!？」

「・・・周りは木々ばかりだな・・・本格的な森なのか？」

「無視すんあああああああああああああッ!!--!!」

ギヤアギヤアとまるで壊れたテレビが発するノイズのような声が響き渡るが、動物一匹すら動く気配がしない。
こりゃ、スゲー深い森じゃないのか？

「マジかよ・・・」

思わず独り言を呟きながら俺は、信じられずに周りを見渡す。
だが、やはりあるのは木々のみであり、完璧にここが学校の屋上どころか、俺達の町の近くでもないことを証明していた。

「まさか、生きてるうちにリアル遭難をするとはな・・・とりあえず、辺りを探索してみよう。人がいるかもしれない。行くぞ、諒助。」

「・・・わかったよ。てか、こんな状況になっても僕の扱いは変わらないんだね・・・」

「ああ、そうだ。」

「断言しないでよ!？」

未だに信じられないが、どうやったって現実是不変。だから、とりあえず俺たちは人を見つけることから始めた。

探索を始め、日が傾くぐらいの時間を歩いているが、それでも人しか動物一匹も見つけることができない有様だった。

「はぁ!はぁ!全然!見つかないな!!」

「ふう、まっただな。」

初めはテンションがかなり高かった諒助もさすがに疲れてきたのか、先ほどから、息切れを起こしている。まあ、もともと体力がないほうだ。この山道のような場所を延々と歩くのは疲れるだろう。

帰宅部ながらも、週に二回はジムに通っている俺もさすがに疲れてきている。体力はそこら辺の高校生よりもあると自信はあるが、この山道はキツイ。

未開の森なのか、整備されている道など一つもなく、延々と獣道を歩き続けるのは堪えるな。

「あの場所で休憩するか・・・」

「そう！だな！！」

少し先に丁度開けた場所があったため、そこで休憩することにした。

「はあ、つつかれた！！」

ボタン！！

と息も絶え絶えとなっていた諒助は地面に大の字になって寝転がった。相当疲れてるな・・・

かくいう俺も諒助ほどではないが、疲れたのは隣に寝転ぶ。

「確かに疲れたな・・・しかし、お前の体力なさは相変わらずだな。」

「うつせえ！！俺はクーラーのついた部屋でずっとパソコンいじればいいんだよ！！」

かなりな駄目発言だが、こいつはかなり本気だ。夏休みにこいつの部屋に遊びに行ったら、クーラーをガンガンにつけて、パソコンば

つかいじつてやがっていたので、その頃バイトも休みに入っていたので退屈だった俺は、諒助を鍛えてやろう思い、俺がこいつを無理やり海に行かせて、溺れかけさせたのはいい思い出だ。

「あれは、本当に死ぬかと思ったぜ。海はなんかより、やっぱりマイルームの方がいいぜ。」

「だから、お前は俺の心を読むな。」

「いや、違う。俺は読んでもんじゃない・・・感じているんだ!!」
「はいはい。」

しばらく、くだらない話を続けて俺たちは体を休める。

それからしばらくして、ようやく息を整えた俺達は暗くなる前に人を見つけるか、森を抜けるためにさっさと出発することにした。

此処は、森の中だ。暗くなって、肉食の動物にでも襲われたら敵わないからな。

「急ぐぞ、諒助。」

諒助に声を掛けながら俺は立ちあがり、砂や葉が付いた制服を払った。

「はぁ、だりいよ。もう少し、休んでいかね?」

「それもいいが、この森に人食の動物がいても知らんぞ。」

「大丈夫だって、さっきから動物一匹もないし。それに、人食の動物なんていないって。」

「お前は・・・それはフラグだろ・・・」

「あ・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・休むか?」

「いや！！さつさと行こう！！速く行こう！！きびきび行こう！！」
ヤケになった諒助は、猛然とやる気を出し、今までの態度が嘘のよう
に感じるくらいに燃えていた。

余談だが、諒助は俗に言うオタクであり、こんな風に脅してやれば
ものすつごく真面目に受け止める。最早、現実と二次元の境界が分
からなくなってしまうほどの末期なのだ。

まあ、俺も諒助に感化され、若干のオタだが・・・

「じゃ、行くか。」

そう言っただけ俺たちは探索を再開した。

「やっぱ、何も見つからないなあ」

「まったくだな。動物一匹もないし。」

俺たちは先ほどの休息から、およそ一時間ぐらいだろうか（二人
とも時計を持っていないので正確な時間がわからない）歩き回った
というのに、未だに何も見つけれずにいた。

「はあ、はやく帰ってゲームしてえ」

と言いながら、ふらふらと歩き続ける諒助。かなり限界に近付いて

いると見える。

「・・・あれ！？あの木・・・スクール水着を来た小学生に見える！！」

・・・最早限界ではなく、臨界点を突破していたらしい。

「まあ、気持ちをわからんでもないけどな。」

正直俺も限界が近い。あれから、ずっと歩き続けていたんだ。そりゃ、限界も来るもんだ。

「ふう。」

一息ついて空を見上げる。真っ赤に染まった空には、何匹かの鳥が飛んでいた。思わず、その動きを目で追っていたら、何か赤い物を目の端が捉えた。

何処かで見たことがあるような気がするのだが、名前が思い出せない。

「おい、諒助。あれ何だと思う？」

そう言っただけは、諒助に赤い物がある方向を指し示す。

「うーん？あれって・・・鳥居じゃないか！！！」

「ああ、鳥居か・・・ってことは、あそこに神社あるのか！？」

神社がある！！ということとは、人もいる！！という思考に一瞬で辿り着いた俺達は、一目散に鳥居が見える方向を目指して走り始めた。

「おお！！まじで神社があつた！！」

鳥居を目指して走り続け、しばらくして俺たちは、無事神社に着く
ことができていた。

「やったな、傭人！！ひたすらに歩き続けたかいがあつたつてもん
だよ！！」

「そうだな。とりあえず人がいるか調べないと・・・」

とりあえず、俺達人が探そうとしたその時、

「あんたたち、此処で何してんの？」

紅と白の巫女服を着た少女がいた。

第1話 始まり（後書き）

とりあえず、一話でした。初めの文は分かる人にはわかる、とあるゲームの一文を載せています^^

さて、投稿してしまったわけなのですが、正直続いていくかが心配ですorz

ストーリーは大体考えてあるのですが、それを受肉していくとなると・・・

やってやろっじゃんかよおおおおおおおおおおおお
 おおおおおおおおおおおおおおおおおおお
 おおお!!!!!!!!!!!!!!!!

第2話 ここは別世界

「……………」

「ずずっ……ふう」

「ずずっ……………」

俺たちは、今お茶を御馳走になっている。上から諒助、俺、そして先ほど出会った巫女だ。何故か先ほどから何もせずじつと正座している諒助が心配だが、まあ、それは置いておこう。

俺たちは、巫女に声を掛けられた後、神社に案内されて、巫女の家
の居間に通されていた。

ここに来るまでに、何度かしゃべりかけてみたのだが、

「いいから、黙って着いてきなさい」

と言われ、ここまで連れて来られた。着いてからは、お茶を出され、それでも巫女は黙っていたので、俺たちもずっと黙ってお茶を飲んでいたのだ。

しかし、このお茶うまいな。癖になりそうだ。とか思っているとや
っと巫女が話しかけてきた。

「私の名前は博麗^{はくれい} 霊夢^{れいむ}。ここの博麗神社の巫女よ。あんた達の名前は？」

「俺の名前は、瀬尾^{せお} 嵬人^{かいと}、そしてこっちは樋口^{ひぐち} 諒助^{りょうすけ}だ。」

「嵬人に、諒助ね。じゃあ、聞いわ。貴方達は、どうしてここに来たの？」

博麗が聞いてくる。

「いや、森を探検していたら、いつの間にか迷子になっていたんで助けを求めようと人を探していたら、あの鳥居が見えたのんで、とりあえず此処までに来たんだ。」

正直に話そうかと思ったのだが、学校の屋上で昼寝してたらいつの間にか森の中にいて、迷ってた。なんて、言えるはずがない。言ったとしても、頭がおかしいとか思われるだけだろう。なので、森を探検していたということにさせてもらった。正直、この年で勝手に迷子になるのも恥ずかしいのだが、頭がおかしいとか思われるよりかはましだろう。

「そう。・・・」

博麗はそれっきり、黙りこんでしまった。またもや、お茶をすする音だけが居間に響く。

質問もされたし、こちらもして良いだろうと思い、博麗に話しかける。

「すまんが、博麗。ここは何処になるんだ？」

とりあえずは、現在の場所を聞いてみる。なるべく知っている所だと帰りやすいのだから。とか思っていると、

「ここは幻想郷よ。」

と、来たこともない地名が返ってきた。幻想郷？そんな地名あったか？名前的には日本の何処かなのだろう。

だが、生憎俺は聞いたことがない地名だったので、都道府県を訪ねてみると

「トドウフケン？何それ？」

との事だった。今時、都道府県を知らない人などいないだろう。つまり、ここは俺が知ってる場所じゃないのか？

だが、話している言葉は日本語。さらに、幻想郷って名前もおそらく日本語だろう。どういうことだ？

俺が混乱していると、博麗がとんでもないことを言い出した。

「やっぱり、そうね。・・・貴方達は外の人間ね。」

「外の人間？」

「そう。ここは、妖怪と人間が住む場所、幻想郷。貴方達が住んでいる所とかけ離れた場所。要するに、別世界みたいなものね。」

「・・・は？」

妖怪？別の世界？一体何を言っているだ？

「その服からしても、やっぱり外来人でしょうね。まったく、また紫の奴が連れて来たのかしら？」

「すまんが、博麗。言ってる意味がわからんのだが・・・」

「要するに、貴方達は別世界にいるのよ。普段は、此处は来ることができない場所だけでも、時々居るのよ。此处に来る外来人が。」

知らない場所だなとは思っていたが、まさかの別世界とは・・・ということはまさか・・・

「俺達は帰れないのか！？」

「いいえ、ちゃんと帰れるわよ。多分貴方達は私の知り合いに面白半分に連れてこられただけだと思うから、さっさと帰すように言うてあげる。ちょっと待ってなさい。」

そう言つと博麗は立ち上がり、居間から出て行つた。

よ・・・良かった・・・いきなり別世界とか言われた上に、帰れないとか言われたら、正直軽く絶望しただろう。

別世界とか言われて茫然としていたのか、ずっと黙っていた諒助に話しかける。

「よかつたな、諒助。帰れるつてよ。」

「・・・」

「?どうした?」

「・・・」

おかしい。テンションが高いが取り柄の諒助が何も話さない。まさか、シヨックが大きすぎて気絶したのか!?
慌てて諒助の様子を見ると、

「zzzz」

寝ていた。しっかりと正座したまま寝ていた。これでもか!?つて
ほど目を開けたまま寝ていた。

・

・

・

ム力ついたから、あつついお茶を膝に掛けた俺は別に悪くないと思う。

「あつちいいいいいいいい!!」

「うるせえぞ、諒助。ここは人様の家だぜ。ちよつとは、静かにしろよ。」

「いやいや、膝がスゲー熱いんですけど!?!まるで、熱湯掛けられたみたいに濡れてて、熱いんですけど!?!」

「何言つてんだよ。何処にも熱湯なんかないじゃないか。気のせいだ、気にすんな。」

「いや、お前の手に代わりになりそうなお茶があるから!!どう見たって、お前がやっただろ!？」

「・・・やつと、帰れるな諒助。」

「話そらすなよ!!帰れるって何!?話が見えないんだけど!!」

あーだーこーだ言う諒助を何とか大人しくさせ、現状を説明する。

「何か、この世界は俺たちの世界とは違う別世界らしく、此処には俺たちの居る場所ではないらしい。」

「うん。」

「で、何で此処に居たのかというと、博麗の知人に連れてこられたらしい。どうやってかはともかく。」

「うん。」

「で、今からその知人に俺たちを帰すように言っているらしい。」

「うん。」

「以上だ。」

「・・・よっしゃああああああああ!!帰れるうううううううううう!!」

一通り説明が終わってからのコイツのテンションの上がりようは傍から見てドン引きである。

正直、コイツが寝ててこの痴態を博麗に見られずに良かったと思っってしまった。

さらに、

「良かったな!!鬼人!!これでやつとエロ・・・じゃなくてギャルゲーできるぜ!!」

「いや、それはお前のことだろ・・・」

こんなにの喜んでいる理由がこれだ。変態以外の何物ではない。こんな奴が俺の親友とは、少々・・・いや大変残念である。

「とりあえず、落ち着けって諒助。ほら、お茶でも飲んで、「いやふうふうふうふうふう！！」(マリオ調)・・・」

・
・
・

「ひゃっはあああ熱いいいいいいいい！！！！顔が熱いいいいいい！！燃えてるうウふうふうふうふうふう！！」

黙らせるために顔面にお茶をかけた俺は悪くないと思う。

それから数十分待つこと、ようやく博麗が一人で帰ってきた。博麗は何も言わずに座り、お茶を飲み始めた。

「博麗、俺たちを此処に連れて来たという人はどうしたんだ？」

「呼んだわよ。もう少しで来るんじゃないかしら？」

そう言つて、再びお茶を飲み始める博麗。

なんだか、マイペースな奴だな。とか思っていると、諒助の奴が俺を肘で突いてきやがった。

「何だよ？」

「なあ、博麗って子。可愛くね？」

・・・いきなり世迷言を言い出す馬鹿^{うろたふ}。普通目の前に本人が居るのにそういうこと言うか？

だが、まああコイツが言っていることはわかる。

博麗は、まだ少女といった具合の体つきだが、バランスが取れていて、スタイルがいい。さらに、まるで人形のように綺麗な顔は無表情だが、それがまた彼女の凛々しさを表わしていても似合っている。

俺たちの世界で言えば、間違いなく美少女の類に分離されるだろう。だが、俺はあまり珍しいとは思わない。
なぜなら、

「・・・なあ、蒐人。よく見てみると博麗って、悠夢に似てねえか？」

「ああ、そつくりだな。」

そう。俺たちのクラスには、夕風 悠夢っていう女子がいる。ソイツが、博麗にとっても似ていた。

性格的なものは、真逆で悠夢はお鈍子もので、騒がしい奴だ。俗に言うムードメーカーってやつだ。

何かとお世話好きで俺も何度かお世話になっていた。クラスだけではなく、学校全体にその容姿と性格で知られている有名人だ。

実を言うと、入学当初。俺も大半の男子と同様に悠夢のことが好きになったのだが・・・告白する勇気もなく、もうその気持ちも今では叶わないと知っている。

なぜなら、俺の一個上の先輩と付き合っているらしいからだ。クラス奴らが言うには、いつも登下校などは一緒にしていて、この前は休日一緒に映画なんかに行っていたらしい。

その先輩が普通だったら、他の男子からボコボコにされている所だが、その先輩は一度見てみたが、俗に言うイケメン。さらには、大

学病院の教授の息子らしい。

当然、まるで神に愛されているような奴に敵うわけないと大半の男子を絶望していた。

俺は初めから叶わない恋だなあと思っていたので、あまりショックは受けてはいなかったが、やはり少しだけ悲しくなっていたのは良い思い出だ。

と、淡い初恋について考えていると、博麗が急に

「やっと来たわね。遅いわよ、紫。」

立ち上がり、何もないところに視線を向けた。

「傭人・・・誰がいるか？」

「・・・いや、誰もいないな。」

俺たちも其処に視線を向けてみるが、誰もいない。まさか、博麗ってヤバイ奴だったのかと思っていると、

「あら？それでも急いできたのに。普段の私と比べて。」

目の前の空間に亀裂が生まれ、

「久しぶりね、霊夢。」

日傘を持った女性が出てきた。

第2話 ここは別世界（後書き）

今見ていると、スゲー詰めて書いているなと思いました。これってやっぱり、もうちょっとスペース空けたほうがいいのかな？
ようやく二話目に行けた。やっぱ、考えている事を文字にするって難しいなと思いました。

第3話 帰れる手段（前書き）

第8回東方人気キャラ投票・・・第1位は・・・博麗 霊夢！！

いやゝ、やっぱり霊夢の人気は不動ですね^^確か、これで人気投票三連続1位じゃなかったっけ？

もちろん、私も霊夢に投票しました！！（笑）

ゆかりんは残念ながら、14位・・・個人的に好きなキャラなので少し残念です・・・段々と順位が下がっている気がするなあ・・・
・きつと気のせいですね！！

第3話 帰れる手段

「まったく、急に来い！！だなんて・・・そんなに私に会いたかったの？」

「違うわよ。あんたはそうでも言わないと来ないでしょ？」

「さすがね、霊夢。私の事よくわかってるわ。」

博麗と親しげに話す目の前の女性のあまりな登場の仕方に俺たちは茫然としていた。

いきなり目の前の空間が歪んだと思ったら、そこからこの女性が出てきたのだ。

どう考えても真つ当な人間でないことは確かだ。

「・・・なあ、傭人。俺は・・・夢を見てるのかな？目の前で信じられない光景が広がっていたんだけど・・・」

と、諒助が言ってくる。正直、コイツがこんなに茫然としていることが信じられないが、確かに先ほどの現象はどんな人であれ、度肝を抜かれるだろう。

「確かにな。俺もビックリしたぜ。」

「そうだな。あんな・・・あんな俺の好みのだ真ん中ストレートの女性がいきなり俺の目の前に現れるなんて！！！！」

「そっちかよ！！！？普通驚くことはそこじゃなくて、あの空間が歪んだりしてたことだろう！？」

思わず素で突っ込んでしまった・・・コイツ・・・さっきの現象について何か思わないのか？

「うんな些細なことはどうでもいいんだよ！！それよりも嵬人！！あの貴婦人はフリーかな？」

「・・・そうだよな・・・お前はそういう奴だったよな・・・」

コイツの馬鹿さに呆れていると、後ろからもの凄い視線を感じた。まるで”俺”という存在を隅々まで見透かされている・・・そんな感じの視線だ。

あまりの不気味さにサツと後ろを振り返ってみると、女性が俺たちの事をじつと見ていた。

思わず唾を飲み込んでしまう。そんな圧迫感が女性の視線にはあった。

「嵬人・・・わかるか？」

「・・・ああ。」

その感じはどうやら諒助も感じたらしい。先ほどのふざけた雰囲気が変わっている。

「あの貴婦人・・・どうやら俺の魅力に一目惚れしたらしいな・・・」

「・・・は？」

「ふつ、あんな情熱的な視線をあんなにも向けてくるなんて・・・俺も罪な男だぜ。（メガネクイツ・・・）」

「お前、もう黙ってる。」

馬鹿に無駄な期待をしていた俺が間違っていた。コイツは、どこまでいっても馬鹿らしい。

呆れて思わず頭を抱え込んでしまう。何でこんな奴と親友になったんだろう？

それはともかく、彼女は絶対人間じゃないよな。どう見ても登場の

仕方が、人の範疇を超えてるし。

博麗が言うには、ここは人間と妖怪が住む場所らしいから、彼女は妖怪なのだろう。

じゃないと、さっきの現象が説明つかないし。とか、考えていると・

「その貴婦人・・・僕と結婚してくださりませんか？」

「！？あの馬鹿！！何時の間に！？」

一瞬目を離してただけなのに諒助の野郎・・・その一瞬で女性の目の前に跪いていた・・・
なんで、こうくだらない事に無駄にハイスペックになるんだ！？

「・・・霊夢。この人間はどうしたの？・・・まさか・・・思い人？」

と言つて、博麗に問いかける女性。諒助はまるっきりの無視である。

「違うわよ！！まったく、私は博麗の巫女よ。そんなもの作らないわ。と言つより、こいつ等の事ならあんたが一番知ってるんじゃないの？」

諒助と恋人かと聞かれた瞬間、即座に大声での否定。しかも、嫌そうな表情付き。これは、きつい。

幾ら好きではないからといって、あんなに否定されるとは・・・諒助、哀れ・・・

案の定、アイツは体育座りで”の”を書き始めるといふ始末。可哀そうに・・・

「さあ？どうかしらね？」

「ふざけないで紫。私はさつさと面倒な事を終わらせてゆつくりとお茶したいの。」

「ふふふ、そんなに怒らないでいいじゃない。霊夢はツンデレね。」
「ツンデレ？何それ？」

「あら？知らないの？外では、大人気らしいわよ、ツンデレが。」

「私が外の世界の言葉なんて知るわけないでしょ。それよりも、紫さつさとこいつ等を外の世界に帰しなさい。」

「はいはい、わかったわ。そのあなた、名前はなんと言いますの？」

「え、と。俺の名前は瀬尾 嵬人です。」

さつきの視線のせいで思わず敬語を使ってしまう。先ほどの压迫感はないものの、やはり少し気負わされてしまう。どうやら、俺は彼女の事が苦手意識があるらしいな。

「そう。ならこっちの方のな」私の名前は、樋口 諒助と言います、
お美しい貴婦人。」・・・そう。」

先ほどまで鬱状態は何処にいったのか、諒助は妙にキザったらしく女性の前に跪いている。

アイツは、自分の格好についてどう思っているかは知らないが、全然似合っていない、一言で表すと・・・キモい。

そう思っているのは俺だけではなく、博麗と女性の方らしい。微妙にアイツから距離をとっていることからして、どうやらドン引きしているようだ。

まあ、そりゃそうだな。いきなり、見知らぬ男が自分の前に跪いて妙にキザったらしくすれば、誰でも引くわな。

「・・・ごほん。私の名前は八雲 紫^{やくも ゆかり}。この幻想郷の管理人の最古の妖怪ですわ。どうやら、私の勘違いで此処に来てしまったようで・

・ 大変お詫び申し上げます。」

「いや、急に謝られても・・・」

「お気になさらずに貴婦人。むしろ、感謝しております。こんなに美しい貴婦人に出会えたのだから。」

まだのこのキャラを通すらしいな。どう見ても相手は引いているの・

つか、やっぱり八雲さんは妖怪だったんだな。で俺は妖怪と聞いてもつと、こっ、エイリアンみたいな奴のイメージがあつたのだが・
・ どう見ても、人間にしか見えないな。

でもやはり、妖怪といったところか綺麗すぎてなんだか人ではないなとも納得してしまう。

何事も、行きすぎるとなんだか人外に見えてくるな。

「あの、俺たちは元の世界に戻るんでしょうか？」

一番重要な事を聞く。もし、これで帰れないとかなったら洒落にならない。

「勿論です。すぐに帰れるようにしましょう。」

と、八雲さんは扇を一振りすると、またさっきのように空間が歪んで割れ目ができた。

・ ・ ・ 一体どうやってるんだ？やっぱり、妖怪だからこんな事ができるんだろうな。

「この穴を通っていただければ無事元の世界に戻れますわ。」

と言って、微笑む八雲さん。それだけならば、俺は安心していただろう。

だが、・・・

「あのく、なんか目見たいなのが穴の中からこつちを凝視しているんですが・・・」

そう、八雲さんが作った穴の中には無数の目があるのだ。しかも、じつとこつちを見ている。

不気味を通り越して、これは怖い。何だか入ったら、もう戻れなくなりそうな雰囲気だ。

「大丈夫ですわ。この目は何もしませんわ。だから、安心して入ってください。」

「はあ。」

どこか胡散臭い笑みを浮かべる八雲さん。正直、入りたくない気持ちが増した。

まじで、これ大丈夫なのか？

「本当に・・・大丈夫なんですよね？」

「ええ。保証しますわ。」

「・・・」

「傭人。お前、こんな美しい紫が嘘をつくはずがないだろう!!」

・・・まじ、もうコイツウザい。

つか、さり気に八雲さんの事を呼び捨てにしてやがる。しかも、下の名前で。

「わかりました。じゃあ、行くぞ諒助。」

「え？なんで？俺は、此処に残って紫と結婚するんだけど？」

コイツ・・・まじで言ってるの？
なんか、もう面倒だな・・・

「おい、諒助。なんか、穴の中に裸の幼女がいるぞ。」

「MAJIDE! ? 何処何処裸の幼女何処に居るの! ! ! ? ? ? ?」

と、不気味な穴の中に首を突っ込む馬鹿^{じょうすけ}。

俺は、諒助の穴から突き出ている尻に標準を合わせると、

「おい、嵬人。裸の幼女なんて何処にもいない」「さつさと行けバカ。
」「いいぞおおおおおおおおお! ?」

思いつきり蹴飛ばした。なかなか似合っているドップラー効果で間延びした叫び声を上げながら落ちていく諒助を確認すると、俺も穴に手を掛ける。一斉に目が俺を見てくる。・・・やっぱ、怖いわ。

「すみません。お世話になりました。」

「いえ、私に非があったので気にしないで下さいませ。穴に入ったら、真っ直ぐに進めば帰れますわ。」

「わかりました。では、失礼します。博麗、世話になったありがとうございます。」

「別に? これは私の仕事だもの、気にしないでいいわ。てゆうか、さつさで行ったら? もう一人の方が待ってるんじゃない?」

「おう。じゃあな。」

八雲さんと博麗にお礼を言うと、俺も諒助の後を追って穴の中へと飛び込んだ。

二人がスキマへと消えると自動的にスキマは閉じるのを見届けると私は、マヨイガの家に帰ろうとスキマを開けた。

「じゃあね、霊夢。また何か合ったら呼んでね。」

そう言つて、私はスキマに入ろうとしたのだけれど、霊夢の声が私を止める。

「待ちなさい。・・・紫。あんた何か隠しているわね。」

・・・何事もなかったように去りたかったけど、やっぱりこの子はそう簡単に帰してくれなさそうね。

「あら？私が何を隠していると言うのかしら？」

「惚けないで。さっきの外来人の二人の事よ。今まで貴方は外来人が来たら、中々帰そうとしなかったわ。散々、外来人で私たちをからかったりして、最後には飽きて、如何にもいらないわ。みたいにスキマに強制的に落として帰していたじゃない。でも、今回はからかうこともなくさつさと帰したじゃない。おかしいとは思わない？」

「単に今日は気が乗らなくて、さつさと帰しただけかもよ？」

「ええ、そうね。あんたならそれも有り得る。でもね、あんたが外来人にあんなにも親切にしていた事が気に食わないのよ。わざわざ、

スキマに入ってから道の教えてたじゃない？しかも、不安がつている奴に対しても安心するように言うし。さらには、あんたを呼び捨てにしていたくせにあんたは何も言わなかった。と言うより公認していた。でも、それはあんたの性格上、怪し過ぎるのよ。人間に呼び捨てにされるのを嫌っているくせに。」

さすが霊夢、観察眼が素晴らしいわね。今の状況では素直に喜べないけど。多分、ずっとボケてもダメよね。」

「それも、気まぐれかもよ？」

「それはないわ。あんたと付き合って長くなるけどあんなに親切な時は見たことないわ。私にもあんなに優しくしたことなんてないじゃない。」

やつぱり。とりあえず、からかって話を逸らそうかしら。

「あら？嫉妬してるの？霊夢。可愛いいわねえ。」

「誤魔化さないで。・・・多分、あんたはあの二人の事を知っているんじゃないの？それに、何であの二人がこの世界に来たのかが気になるわ。あんたは、多分あの二人が此処に来ている事を知らなかったのでしょうか？幻想郷の管理人であるあんたに気付かれずに此処に来れる奴なんてそうそういない。だから、あんたは警戒して観察していた。・・・違う？」

駄目ね。・・・まったく、何でこの子はこうも勘が鋭いのかしら？時々嫌になるわ。

最も、全てが合っているというわけではないけど・・・

「・・・そうね。確かに私はあの二人がどうやって此処に来たかを知らないわ。少なくとも、彼らは幻想入りしたわけでもなかったわ。

「ええ、私から見ても、あいつ等は能力を発現してはいなかったわ。能力を持つていないかは分からなかったけど。少なくとも、幻想入りするほどの能力をは見られなかった。」

「でも、彼らは此処・・・幻想郷に来る事が出来た。・・・私にも、何で彼からが幻想郷に来れたかが分からないわ。」

そう、私にもそれは分からない。幻想入りする他にこの世界に来れる方法はスキマを通る事だけ。幻想入りではないとしたら、私のスキマを通ってくるしかないのだけれど・・・私にはそんなスキマ開けた記憶がない。

でも、彼からは幻想郷に居た。正直、どうやって来たのか見当もつかないわ。

「ふうん、妖怪の賢者って言われてるあんたでも分からない事があるのね。」

この子・・・明らかに私の事をバカにしているわね。ほんの少しニヤヤしながら言ってくる所が、ちよつとム力つくわね。

「それはそうよ。私にだって、知らない事、分からない事はあるわ。ただ、その数が少ないだけよ。」

「そう。・・・で、あんたはあいつ等の事を知ってるの？」

あらう、これでこの話を終われると思ってたけど、やっぱりその事について聞いてくるのね。話したくないのよね、その事については・・・

「いいえ、私は彼らついてはまったく知らないわ。初対面よ。」

「だったら、何であんなに親切だったのよ。初対面と言う割には、

第3話 帰れる手段（後書き）

さて、結局戻ってきてしまった主人公たちでした（笑）

この作品は結構・・・というよりほぼ作者のオリジナルな解釈
出来ています。

なので、あれ？って思ったことなどは、感想でおっしゃってください。
い。なるべく、お答えします。

でも、話の内容に触れる質問はお答えできませんので、よろしくお
願いますm（――）m

第4話 居候

「か、傭人・・・やっぱ戻らねえ？」

「・・・さっきまでの勢いはどうしたんだよ諒助・・・」

八雲さんに見送られて、あの穴の中に入った方がいいが、さっきから諒助が泣き事しか言わず、ビクビクとして進もうとしない。

ゆえに、五分も経ったのに未だに出口に着けずにいる。

八雲さんの前ではあれほど「大丈夫です！！！」とか言ってた癖にして、いざ行くとこのビビリである。凄く残念な奴だ。

ともあれ、俺としてはさっさと帰りたい気持ちがあるので、少々強引な方法を採る事にした。

「おい、諒助。さっさと行かないと、お前のPCをスクラップにするぞ。」

「ハア！？ちよつ、おまつ、それ洒落になってねえぞ！！」

「当たり前だ、洒落じゃないからな。」

「・・・ちくしょうおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！」

・・・現金な奴だな。

諒助とは一緒に寮に住んでいて鍵は俺が管理しているから、アイツを部屋にいれずにPCをスクラップにすることなんて簡単な事だ。それを、わかっているアイツは必死に走りだす。まったく、手のかかる奴だぜ。

「はあはあ、やつつと……疲れたあ。」

「……お前、速すぎるだろ……なんで、あんな速度出したんだ？」

「いや、お前が原因だからね！！！！お前が、俺の命と言っても過言じゃないMY PCをスクラップにするとか言うからだからね！！！！」

「……ＰＣごときにそこまで必死になるなよ……」

「何言ってるんだよ、嵬人！！俺の人生はPCに始まって、PCに終わるんだよ！！！！二次元は俺のジャスティスダああああああああああああああああ！！！！！！！！！！」

⌈
•
•
•
⌋

あまりに気持ち悪かったため、思わずドン引きだ。最早、ここまで来たらもう何も言えないな。

むしろ、言っても無駄そうだ。まあ、前からこんな奴だったためもう半分は諦めてるがな。

「つと、ようやく見えて……あれはなんだ？」

「?どうしたんだ、鬼人?何か問題でも・・・え?」

初めはボンヤリとした光でしか見えなかった出口が要約視認出来始めたのだが、何故かその出口の周りに薄い紫色の霧がかかっているのだ。

「あれは・・・色的に毒？」

「に、しか見えないな・・・」

またもや、ここで問題発生である。どうやら、神様とやらは俺たちに嫌がらせをするのが趣味のようだな。

「・・・さて、状況を整理しよう。出口らしきものは此処だけだ。それに、八雲さんがここを通れば元の世界に帰れると言っていた。そうだな？」

「ああ、確かにその通りだ。紫の言う事には間違いはないからな。」
「・・・未だそれを通すのかよ・・・まあ、とりあえず此処を通る他帰る方法はないな。だが、その出口に明らかに怪しさ全開の毒々しい色の霧が立ち込めている。これが、安全なものかどうかはわからないから、安全かどうかを確かめなければならない。そこで二人の内一人が先に通って安全を確かめたら、もし仮に一人が死んでももう一人は生き残る。つまりは、一人が犠牲になっても一人は助かるわけだ。・・・な、諒助。」

「・・・おい、何故俺の肩に手を載せて、期待した目でこっちを見る！？俺は行かねえぞ！！！！こないかにも毒の霧です！みたいな所に行けるか！！！！！！！！」

「・・・」

「何故、黙る！？」

「・・・悲しいけど、運命って残酷なのよな・・・と、言うわけで
「おい、マテマテマテ俺を持ち上げてどうする！？下ろせ、テメエ！！」諒助、「くっ！！この！！ちくしょう！！！！なんでこんな力強いんだよ！！」俺のために「・・・あの、傭人さん。段々霧に近づいて行ってるんですけど、冗談ですよ、はっはっはっ・・・まじで？」行つてこおおいにいいいいいいいいいいいいいいいいいい！！！！！！！！「させるかああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！！」なっ！？テメ、離せこの、う、うおおおおおおおおおおおおおおお！！！！」

こうして、俺たちは出口に落ちていった。

「・・・以上が、俺たちがそのスキマとやらに入った後の行動だ。」
「そう・・・つまり、あんた達のアホな漫才で私の居間のちゃぶ台が犠牲になったって事なのね。」

「・・・すみませでした。」

現在の状況の説明をしよう。出口に落ちた後、何故か博麗神社の上空に出されて、そのまま重力に従い落下。そして、丁度今の真上に
出たらしく、屋根を突き破り、博麗と八雲さんがいた今のちゃぶ台の上に墜落。

博麗は、俺たちがちゃぶ台を壊した事に激怒。スキマ（俺たちが、
入った穴の事。）に入った後の行動を報告。俺達、土下座。まあ、
ざっとこんなもんだ。

それどころの現状ではないのに、博麗の修羅の如きのような怒気の
オーラに逆らう事ができずに、今に至る。

「・・・まあ、いいわ。とりあえず、それは置いとくとして。紫、
なんでこいつ等此処にいるのよ？外界に帰したんじゃないの？」

どうやら、俺の聞きたい事は博麗が聞いてくれるらしい。

俺たちは、八雲さんの言うとおりに出口まで真っ直ぐに行った。なので本当なら、今では元の世界に戻っている頃はずなのだが、現実、帰る事が出来ていない。

俺たちは此処に戻ってきているのか？これが、俺の疑問。博麗も同じ事を思っただろう。と、言う事はこれはわざとではなく、予想外だった。ってことだ。

だったら、俺たちを送った張本人である八雲さんは知ってるかもしれないと思っていたのだが、

「ええ・・・確かに、帰したわよ。ちゃんと、外界に続くスキマを作ったのに・・・」

「でも、こいつ等は戻ってないわよ。・・・まさか、あんた騙したんじゃないでしょうね？」

「いいえ、確かに帰したわよ。これは、誓ってもいいわ。」

「そう・・・なら、なんでこいつ等は此処にいるのかしら？」

「正直、わからないわね。この事は、私も予想外よ・・・」

八雲さんも同じく、予想外の事だったらしい。美しい顔のまゆげを寄せて、悩んでいる顔をしている。

ちなみに、超余談だが、その困っている顔もまた美しく、美人はどんな顔でも美人なんだなと思った。

・・・なんか、この思考、諒助みたいだな・・・なんか、ショックだ・・・

つと、そんなくだらない事で落ち込んでる場合じゃないな。俺は、八雲さんに向き合い、声を掛ける。

「八雲さん、俺たちは・・・どうなるんですか？」

俺たちはどうなるか？それは、元の世界に帰れるのか、帰れない場合はどうなるのか？という意味の問いかけだ。

ここら辺は、キツチリとしとかないといけない。帰れる場合は、何も問題はない。だが、帰れないとなると・・・俺たちは、どうなる？こんな、身寄りもなく、知り合いもない世界で、高校生二人が生きていけるはずがない。

「大丈夫ですわ。貴方達は、私は責任をもって、元の世界に帰します。」

「そうですか・・・」

良かった・・・最悪なケースは、ないらしい。少し安心した。しかし、八雲さんの言葉はそこでは、終わらなかった。

「ただ・・・」

「ただ？」

「今回の事は、私としても予想外の事だったので、原因を突き止めるのに少し時間が掛かると思います。」

「どのくらい掛かりますか？」

「・・・今では、何とも言えません。ただ、私も全力で調査しますから、大体一か月がたつまでは、終わると思います。最低、二週間は掛かるでしょう。」

直ぐには、帰れないと来たか・・・俺としても、八雲さん達にとってイレギュラーの事だったから、直ぐには帰れないとは思っていたけれど・・・最短で二週間か・・・思ったより、長いな。

だが、こちらとしては戻る手段が八雲さんのスキマ以外に方法はないので、選択権なんてない。此処で、暮らす他の選択はないのだ。

「わかりました。しかし、俺たちは何処で生活すればいいんですか

「？」

問題としては、何処でその期間を生きるかという事。こっちは、俺たちの知り合いなどいるはずもなく、衣食住を当てにするとところなどない。

ゆえに、野宿するしかないかなあ〜と思っていたら、八雲さんがビツクリ発言をした。

「それは、此処、博麗神社にお泊りになって下さい。」

「此処にですか？」

「はい。此処は、比較的に他の所より安全な場所ですし、なにより霊夢がいますから。」

「はあ！？ちよつと、紫！！それ、どういう事！？」

「どう言う事って・・・仕方がないじゃない。此処ぐらいしか、泊まる場所がないじゃない。」

「あんたのどこでもいいじゃない！！元々、あんたが帰せないのが悪いんだからそっちに泊めなさいよ！！」

「貴方は、博麗の巫女でしょう？外来人を、案内する役目は貴方のはずでしょう？だったら、此処に泊めた方がいいじゃない。」

「いやよ！！泊めるのだって、ただじゃないのよ！？」

まあ、確かに。男、しかも、よりによって高校生という一番食べる年ごろの奴が二人も居たら、食費などもバカにならないだろう。

これは、長引きそうかなあ〜と思っていたら、

「そこは、この人たちにその分働いてもらえばいいでしょう？男手が二人も増えれば、貴方だって働かなくてもいいかもよ？」

「それならいいわね。」

「はやっ！！」

あつさり、承諾してしまった。思わず、声が出てしまうほど決断が早かった・・・

「と、言う事でよろしいですか？」

良いも何も、こちらとしては衣食住の場所を提供してもらえただけでも嬉しいので、承諾しようと思事をした。

「あ、ああ、いいで「勿論です!!!」霊夢と一緒に暮らせるなんて・
・最高だあああああああああああああああああああああああ
あああ!!!!!!」・・はあ。」

「そ、そうですね。」

「……なんか、こいつだけ泊めたくないわね……生理的に。」

ドン引きする二人の女性。まあ、気持ちわかる。こんな変態は誰

「ひゃっほ、おはよう、おはよう」

「……」

勢いで外に飛び出していく馬鹿りようすけ。なんとも言えない空気が場を支配する。

⌈
•
•
•
⌋

⌈
•
•
•
⌋

⌈
•
•
•
⌋

誰も何も言わない。無言が居間を支配する。さっきまでのシリアスな雰囲気が出無しかった。とりあえず、俺が

ら口火をきる。

「ま、まあ、これからよろしく博麗。」

「え、ええ、よろしく唄人。」

そして、俺たちの幻想郷の生活が始まった。

Side
???

くっくつ、順調だ・・・此処までは、思い通りになったよ。

いきなり帰るとは思わなかったけど、なんとかそこは凌げたね。

まったく、普通は別世界とかに来たら探検しようとかおもわずに、ただただ、いきなり帰ろうとするのは予想外だったよ。

まっ、全てが全て脚本通りにいくわけがないか。それに、予想外の出来事があっても元の路線に戻するのが一流の脚本家ってもんだよ。うん。

これからどうなるかな？ 哀れな操り人形の劇は？

くく．．あはははははははははは！！！！！

!!!!!!!!!!!!

第4話 居候（後書き）

ひっさしぶりの更新です。

誠に申し訳ありませんでしたm（――）m

今回の話は、なんか考えるのが難しく、めっちゃくちや手間取って書きました。

ゆえに、なんかこう辻褄が合わなかったり、変に感じるところがあるかもしれません。

そういうところは、指摘して下さい、お願いします。すぐに、修正にかかりの。

余談ですが、とうとう東方Project第13弾 東方神霊廟の発売が来ましたね^^非常に楽しみです！！今回の自機が、霊夢、魔理沙、早苗、そして・・・みょん！！

まさかです。非常に驚きました。はい。

東方永夜抄以降ですかね、みょんの自機は。永夜抄では、かなり使い勝手が良いキャラだったんで、結構使ってました。

個人的には、白蓮に自機になって欲しかったなあ・・・

それと、今回のあらすじが霊がワラワラと出るとかだから、魅魔様出ないかな？なんて思うけど、やっぱり旧作キャラはいつも通りでないですよ。

何にせよ、楽しみです！！！！

もち、体験版はやります！！

第5話 博麗神社の朝食（前書き）

またもや、のんびりとした更新。

誠に申し訳ないm（――）m

第5話 博麗神社の朝食

ちゅんちゅんちゅん。

鳥のさえずりが聞こえる。

ぬるま湯のように温かなまどろみの中でゆっくりと意識が覚醒していくのを感じた。

「ふあああああ……」

俺は大きく欠伸をすると、むっくりと起き上がる。

畳の上で寝ていたので、カチコチに固まった体をほぐすように大きく伸びをする。

「……寝みい。」

開かれた窓から温かい日差しの上と、心地よい風が舞い込んでくる。布団の中の体にほんのりとした温かさがしみ込む。

二度寝したら、気持ち良いだろうなあ……と思いながらも、俺は布団の中から這い出る。

この調子で、二度寝を決め込むと必ずと言っていいほど爆睡する。誰もが経験があるだろう。学生ならば、尚更だ。

このまま欲望に負けて寝てしまうと、必ずと言っていいほど寝過ごしてしまう。俺も何度かこのような状況に陥り、学校に遅刻したことがある。

そついうわけで、起きようとするのだが……

「うみゅ……あいたん……行っちゃヤダよぉ……ぐう。」

何故か、俺の手を掴んで離さない諒助のせいで起きようにも起きれ

ない状況にある。

引つ張つて手を抜こうとするけれど、無駄に力強く握られているために抜くことができない。

「おい、起きろ諒助。もう朝だぞ。…おい、起きろつてば。」

軽く揺すつて声を掛けながら起こそうするが、一向に起きてはくれない。むしろ、手を握る力が強くなっていつている気がする。

「ああ、あいたんのほつぺ気持ちい…スリスリ」

キモツ!!コイツ、俺の手を頬に当てながら頬ずりしてきやがった!!あまりにも気持ち悪すぎるので必死になって抜こうとするのだが、やはり抜く事が出来ない。
つたく、迷惑な奴だな。

「つち!!仕方ねえ…ちょっと荒っぽく起こすか。」

あまり使いたくなかったが、俺としては一刻も早く手を抜きたいので最終手段を使う事にする。これ以上こんな気色悪い事をされると、諒助症候群にかかるからな。

まずは、自由な右手を諒助の頭の方へ持つていく。そして、もみあげを掴むと一気に引つ張る!!

「っおらあ!!!!」

「いつてええええええ!!!!!!!!!!」

ふう、やっと手を離しやがったか。

つて、うわ。よほど強い力だったのか、諒助の手形が付いてるよ…

「最悪だな、お前。」

「それは、お前だあああああああああああ！！！！」
「えっ！？何故？」

「何、俺何もしてませんよみたいな顔しちゃってんの！？お前だよ
ね！？俺のもみあげ引つ張ったの！？さつきから、マイもみあげが
エマーゼンシー発してるんだけど！？」

あゝ、面倒くせえゝ。だから、使いたくなかっただよなあゝ、これ。
使うと十割の確率で五月蠅くなるから。

「は？何言ってるんだよ、諒助。俺がそんなことするはずがないだろ
？」

「いや、お前のその右手に結構な数の毛が握られてるんだよね！！
！！」

「…汚ねえな。猫の毛か？」

「俺のもみあげの毛だよ！！！！！！！！！！！！！！！！」

「……………」

「むっさ、嫌そうな顔をすんじゃねえよ！！！！！！てか、やっぱり
やったのはお前だな！！！！！！！！」

「さて、さっさと布団をなおすか。」

「無視すんじゃないええええええええええ！！！！！！！！」

やっぱり、五月蠅くなったか。

とか思いながら、自分の布団をたたみ押入れの中になおす。

「おら、お前をさっさと布団をなおせ。今日から俺たちは飯を作ん
なきゃならないんだぞ、そんなに騒いでる暇なんかなんだよ。わか
ってんの？」

「いや、原因はお前だからね！！！！」

「はいはい、ワロスワロス。」

[illegible]

そんなやり取りをしながら、ちゃっかりと布団をキチンとなおして
いく諒助。なんだかんだ言いながら、コイツはやるべき事はやる奴
だ。

「はい、完了。」

「よし、じゃあ行くか。」

そう言いながら、向かうは台所。

男とはあまり無縁な所だし、俺達には料理の趣味なんて欠片もない。なら、何故向かっているのかというところ……

「今日から、朝昼晩、全ての食事を作んなきゃならないと思うと気が重くなってくるな……」

俺たちが今日から朝昼晩と全ての食事を作らなければいけなくなつたからだ。

「仕方ないだろ？此処に泊まらせてもらう条件なんだからよ。」

「いや、でも、ほら、霊夢の奴俺達に仕事押し付けすぎじゃない？」

.....

…否定の言葉が見つからない……思わず、遠い目をして思い出すは
昨日の晩の事。

俺達が此処に滞在する際の条件が博麗のやつから提示された。それは、

？ 全ての家事は俺達がやる事。
？ 博麗神社の仕事を手伝う事。

？暇さえあれば、人里に下りて金を稼いでくる事。

の三つである。どれも、本来は博麗がすべきことだ…いや、最後の以外か。

まあ、ともかくそれを俺たちがやる事になったのだが、明らかにほぼ全ての仕事を俺たちに押し付けていると思える。

泊まらせてもらう身なので、家事くらいはともかく、神社の仕事。

そして、暇な時は金稼ぎ。これでは、まさに奴隷だ。

一応反論はしたのだが…

以下回想

「さすがに、仕事が多すぎるんじゃないのか？博麗。」

「そう？此処に泊まるのならこれぐらいしてもらわないと割に合わないわね。」

「だが、これでは俺たちが全て此処の仕事をすることになってしまっているのだが…」

「いやなら、いいのよ？でもね、外は妖怪が一杯よ？ここじゃあ、あんた達の知り合いなんていないから、野宿するしかないけど。それだと、あんた達普通の人間だから、すぐに他の妖怪に食べられてまうかもねえ」。まあ、此処に居れば安全だけど？」

「……………」

「ここで働いて安全に過ごすのと、外に野宿して妖怪にペロツと食べられちゃうの、どっちがいい？」

回想終了

あっさりと返されて、条件を飲み、そのまま今日を迎えた。

なんだか、すごく納得がいかなかったが、命に代えられぬという事で条件通り、家事の一環として食事を作るために台所へと向かっているのだ。

正直、料理とか特別に得意とかではない。一般常識程度のものが作れる程度だ。それに、家事とかもありした事などない。

母親の手伝いとかの程度のもものは出来るのだが、本格的なものなどはまったくわからない。

つまり、とても苦勞しそうだと言う事だ。

「つと、着いたな。じゃあ、さつさと朝飯を作るか。」

「おう！……！」

「諒助は、ご飯を炊いてくれ。俺は、味噌汁を作るとしよう。」

「わかったぜ！……！」

とりあえず、朝飯の王道として、ご飯と味噌汁。そして、焼き魚を作る事にする。無駄にカッコつけて失敗したら元も子もないからな。材料や道具に関しては、昨日博麗から一通りの説明を受けていたので困る事なく用意はできている。

「さて、やりますか。」

数十分後、今の机の上には立派な朝食が並んでいた。

メニユーは、味噌汁、白飯、焼き魚、そして卵焼きだ。

味噌汁が意外と時間が掛からずに作れてしまったので、おかずを一品増やしてみた。

「おお、立派な朝食になってる……俺ってスゲーな!!」

「いや、お前が作ったのは白飯だけだから……」

「十分じゃない？俺にしては？」

「…確かに。」

諒助も無事に白飯を炊けていた。コイツは、一人暮らし癖にして自炊が出来ず、前に飯を作らせた時はおかずは愚か、白飯だって炊く事が出来ていなかった。

さすがにまずいと感じた俺は、わざわざ一通りの料理を母から学んでコイツの教えたのだが、結局は出来ることになったのが白飯を炊く事。それ以外はからつきし駄目のままだった。

しかも、その白飯も成功率が約六割と微妙なラインなので、コイツは白飯を無事に炊けただけでも十分な事なのだ。

「あら、ちゃんと作れてるのね。朝食。」

丁度良いタイミングで居間の襖が開けられて、昨日と同じ巫女服と大きなリボンの髪留めを付けて博麗が入ってきた。

「お早う、博麗。」

「おっはよう、霊夢!!!」

「お早う、二人とも。しっかりと条件は守っているみたいね。」

「ああ、言いつけ通り家事をやってるぜ。」

そう言いながら、俺達三人は座り、目の前の料理に目を向ける。

「温かい内に早く食ってしまおうか。」

「同感だ……めちゃくちゃ腹が減ったでヤンス。」

「そうね、それじゃあ、」

「……いただきます。」

自分で言うのもなんだが、結構うまい感じで作ることが出来たと思うので、味が楽しみだ。

箸を伸ばし、焼き魚の身をほぐして、白飯と一緒に口へと放り込む。

「普通にうまいな……」

口では、母が毎日作ってくれた朝食となんら変わらない味が広がっている。初めて本格的に作ったにしては、想像以上に良く出来ていると思う。

そう考えていたのは、他の二人も同じらしく、

「うおおおお！？めっさうまい！！！！」

「……………予想外ね。おいしいわ。」

二人とも、驚いた風にしてうまいと言っていた。作った身としては、嬉しい限りだ。

「これは、どっちが作ったの？」

「白飯を炊いたのが諒助。他は全部俺だ。」

「意外ね……てつきり、作った事がなさそうだったからお茶漬けでも出てくるかと思ってたわ。」

すごい意外そうな顔をして、此方を見てくる博麗。

少しその発言になんだかイラッとしたが、作った本人が驚いてるん

だから、仕方がないだろう。

「前に、母から料理を習ったことがあったからな。それで、うまく作れたんだ。」

「そう。これなら、料理は任せても大丈夫そうね。」

どうやら、満足してもらえた見たいだ。諒助はと言えば、ガツガツと勢いよく飯を食らってる。

俺もさっさと飯を終わらそうと思い、食べることに集中した。

「ふう、満足したあ。」

「私もね。暫らくぶりね。こんなにちゃんとした料理を食べたのはおいしかったわよ。」

「そりゃ、良かった。てか、諒助。お前は満足しないで後片付け手伝え。」

「へいへい。」

家事の一環として、片付けもしないといけないので博麗みたいにゴロゴロとしたいのだが、それを思い止めながらちゃっちゃと皿を台所の流し台へと運んで行く。

そんな俺を置いて寝転がっている諒助を一蹴りして、手伝いを促す。

「俺が洗うから、お前は拭く役目な。」

「OK!!!」

「……割るなよ?」

「大丈夫だって!!!俺を信じるよ、傭人!!!」

諒助に一抹の不安を感じながら、ちやくちやくと皿を洗っていく。それを危なっかしい手つきで諒助はタオルで拭いていく。そんな流れ作業も無事に皿を一枚も割ることなく終えて、居間へと足を運んだ。

「後片付け終わったぞ。」

「御苦労さま。」

居間では、博麗が完全にだらけており、寝転がったまませんべいを齧っていた。

こちらら、コイツのために働いているというのにこの態度に少々いや、かなりイラッと来たが、まあ、泊めてもらっている身なので文句なんぞ言えるはずもなく居間に腰掛ける。

「それで、この後どうすればいいんだ?」

家事か神社の仕事やらをしなきゃならないといけないのだが、その内容が分かるはずもないので、指示を博霊に仰ぐ。

「そうね…今日は、人里に行って働く場所を見つけてきなさい。」

「え?」

「暇な時に出来て、お給金が良い所が好ましいわね。」

「いやいや、早速働く場所を決めるのか!？」

「ええ、そうよ。幸いに今日はこれといった仕事もないしね。丁度いい機会だから行ってきなさい。」

まじかよ…

第5話 博麗神社の朝食（後書き）

全然、ストーリーが進めてねえ……orz

こんな調子で完結とかいけんのかな？不安になってきたよ……

今回の話は、日常。大半が諒助との絡み。……どうしてこうなった……

余談

小説を書くためと思い、今東方シリーズを一からノーマルでやっているが……

何回やっても、何回やっても、ノーマルがクリアできないよおおお
おお！！！！（泣

ずいぶんと腕が落ちてしまったようだ。紅魔郷とかパチエで二機落ちとかかしていまい、あっけなくPA（ryにピチュられ、なんとかおぜう様に辿りつくも残機0となりゲームオーバー……
ちよつと、泣きそうになったのは此処だけの秘密。

後、今やってるゲーム「恋と選挙とチョコレート」の皐月がかわゆすぎて萌死んだ。

第6話 邂逅（前書き）

ふう…まるで一カ月ぶりの投稿だ…

……………ほんつとうにすんません！……！……！m（——）m

ちよつと、AVAっていうFPSにハマってたら、何時間にか月日は流れていたんです…

これから、また復活するんでよろしくです！……！……！m（——）m

第6話 邂逅

「はあ、はあ、…い、一体この階段何段あるんだよ…？」

「か、軽く百段は越えてるな…」

息を切らしながら下りているのは、人里へと続く階段だ。

仕事を探して来いと言われた俺たちは、この糞長い階段を必死こいて下りている。

博麗神社から見て地面が見えなかったから恐らく長いであろうと予想をしていたが、ここまで長いとは思いつかなかった。

始めはちよつとした遊びという事で階段の数を数えてもいたが、八十段辺りから体力の低下と共にやる気も低下。

今では、そんな余裕などあるはずもなかった。ただひたすらに階段を下りているだけある。

「つたく、何でこんな長い階段を作ったんだよ…明らかに不便だろ。」

「確かに、参拝客が神社の癖に来てないなあ…と思ってのだが…こりゃ、来ないわな。」

「だな。下りだけでもこんなにきついのの上りとかになったら…死ぬる。」

「俺なら、霊夢のためなら行けるけどな…！」

「はいはい。」

「…なんか反応冷たくない？」

「そんな事ねえよ（ここで絡むとまた面倒になるからだよ）。つと、ようやく見えてきたな。」

神社を出て階段を下り始めてはや二十分が経とうとしている時に、ようやく地面が見えた。

ここまで時間を掛けて下りたことから、如何にこの階段が長いのかを思わせる。

「やつとかよ…どんだけこの階段長いんだか。」

「相当長いだろうな…まあ、後少しなんだ。へばるなよ諒助？」

「へい。」

到達地点が見えた事があり、心なしか軽くなった足を動かす。

「しっかし、またド田舎な所だよなあ…。周りが木で覆い尽くされてるぜ。」

「それだけ、文明が発達してないって事だろ。道らしき道も見えないからな。」

見えてきた地面もとてもじゃないが、舗装されているとはほど遠く、ただ単に草木が生えていない通るだけの場所。ってな感じだ。

「…本当に、この世界は俺たちの居た世界とは違うんだな…」

「…ああ、そうだな…なんだ？まだ信じてなかったのか？」

「まあね。そりゃ、いきなり別世界ですよ。って言われても、普通は信じられるか？」

「だよな…起きてる事はある得ない事ばかりだし。」

諒助との会話をきかっけに昨日の事を振り返ると、まるでフィクションのように感じる。

目を覚ましたら、知らない場所に連れられていた。空間を割って移動するという奇天烈な事象。

あり得ない事ばかりだ。きっと、俺達以外の人が代わりに来たとしてもあまり俺達の反応と変わらない反応をするだろう。

昔の話だが、かの有名なガリレオは、当時の一般常識を覆す地動説

を説いただけで、周りからは徹底的に批判され、拳句の果てには異端審問で軟禁状態にまでさせられたという。

要するには、人は異質、異常を認めようとしないのだ。例え、それが表れたとしても、それを排除しようとする。中世末期から近代にかけて見られた魔女狩りが良い例だ。

俺たちは普通の人間だ。しかも、まだ社会人にもなっていない高校二年生。諒助が戸惑っているのは無理もない。

「まつ、元の世界には帰れるってんだ。あんま気にすんなよ。そんな考えてるなんてお前らしくねえぞ？」

「…おう。サンキュー、嵬人。」

「良いってことよ。さ、着いたぜ。」

「やつとか…」

長かった階段の最後の一段を降り切り、一息をつく。

「ああ、やつと着いたあ。」

「ふう…真剣で長かったな。」

今まで下りてきた階段を見上げる。

「何のためにこんな風に長くしたんだか…」

「まあ、いいじゃん。下り終わったんだし。」

「諒助…帰りはここを上らないといけないんだぞ？」

「…言わないで欲しかったよ…何で現実ってこんなにも厳しいんだろ？目から汗が出てきたぜ…」

背後に“ずん”と付きそうな暗い雰囲気で座り込む諒助。まったく、こんな調子だと人里に着くまでに日が暮れるぞ。

「ほら、んな落ち込んでる元気があつたらさつさと行くぞ。」

「…いや、元気がないから落ち込んでるだけど…」

「……………」

「……………」

「死ねっ！！！」

「逆ギレ！！??？」

「…ここは…何処だ？」

「…森だねえ。」

諒助に揚げ足をとられるという痴態は曝してから早一時間。俺たちは絶賛の迷子になっていた。

「…たく、博麗の奴。階段を下りてまっすぐ行けば、人里に行けるんじゃないかったのかよ…」

そう、博麗が言ったとおり階段を下りた後、俺たちはひたすらにまっすぐに進んできた。明らかに未開の樹林だったのだが、どちらにせよ周りは森。となれば、博麗の行っていた通りにまっすぐ行ってみようと言う事になったのだ。

だが、結果はこれ。迷子という名のオチだった。

「いかん…本当にどっちに行けばいいのかわからん。」
「うーん、来た道に戻るうにもわかんないなあ。」

振り返っても、見えるのは変わらずの木、木、木。俺たちが進んできたという軌跡はまったくない。つまり、確実に戻れるという保証はなく、さらに迷う可能性がある。

「こんなことなら、なんか目印でも付けておくんだっただぜ。」

「だな。とりあえず、進むか？」

「そうだな、現状博麗の言った事が本当だと信じてまっすぐ進むしかないな。」

「おう。…てか。なんか怖くない？ここ。」

「お前…ビビりすぎだろ…」

確かに周りは木…というより竹か？しかなく日の光さえ竹の葉に遮られ、昼間の癖にして薄暗い。

だが、しかし仮にも高校二年生の癖にしてこの程度で怖いはないだろう。

「いや、ほら、この世界って妖怪とか居るんだろ？なんか出そうな雰囲気じゃない？」

「…否定はできんな。」

「だろ？」

そういえば、この世界って妖怪の住んでる世界だったっけ…すっかりその事が頭から抜け落ちてた。

これで諒助のあまりなビビリ様が納得できた。

「でも、ホントにいいのか？妖怪なんて。」

「霊夢と紫は居るって言ってたじゃん？しかも、紫のあの奇天烈な

能力が紫を人間じゃないって言ってるもんだぜ？」

「それはそうだが…ほら、妖怪つてもっとこう化け物みたいなイメージがあるんだよ。八雲さんは、何処からどう見ても人間の容姿じゃないか。能力は置いといて。」

「まあ、確かに。」

「それを、どうしても妖怪だと思えなくなてな。しかも、未だに八雲さん以外の妖怪なんて見てないだろ？だから、ホントは妖怪じゃなくて突然変異体ミュータントみたいなものじゃないかなと思ってるんだ。」

「突然変異体か…ま、どっちにしる人外ってこつた。」

「あくまで俺の予想だけだな…」

妖怪とは何か？何をもって妖怪と定義づけるのか？それは、分らない。あくまで元の世界の知識をベースに考えたものだ。しかし、それはこの世界で通用するものか？この世界での常識は俺たちの常識に当てはまるのか？

考えだしたらキリがない。そもそもここが別世界だってことさえ怪しいのだ。確かに俺たちは八雲さんの人外能力を見て、体験した。しかし、それは何かの仕掛けによって惑わされたものではないか？博麗や八雲さんが俺たちを騙しているという可能性も捨てきれない。つまりは、俺は本当の意味でこの世界で起きた事を未だに信じていないのだ。博麗や八雲さんの事でさえ。表面上は信じているフリをしているが、心の奥底では疑っている。それが、俺という人間…やっぱ、俺って奴は最低なんだろうな。

「どうしたんだ、傭人？なんかめっちゃ思いつめたような顔して。」

「…いや、なんでもねえよ。ほら、さっさと行くぞ。」

「あつ、おい、置いてくたあー！！！！怖いんだよ！！！」

幾ら疑ったとしても、現状それを確かめる術はない。何にせよ、今の俺達にできることは、八雲さんが俺たちが元の世界に帰れる方法

を探し当ててくれる事を祈ってそれまで生き残る事だ。

「まったく、面倒くせえことになったぜ。ほら、諒助。何突っ立ってるんだよ？さっさと行くぞ。」

何故か立ち止っている諒助。何してんだ？

「なあ、傭人。何か聞こえない？人の声が。」

「ああ？こんな所に人がいると思うか？まあ、俺達の事は除いてよ。」

「いや、でもこれは子供も声だぜ？耳を澄ましてみろって。」
「…分かったよ。」

諒助に言われたとおりに耳を澄ましてみる。どうせなんかの音の聞き間違いだと思っが…

「……………え……………」

！？

「子供の声だ……………」

「だろ？声にあどけなさが残ってるから、多分幼稚園生ぐらいの年だぜ。」

「ああ…………チツ！！遠すぎて何言ってるのかわかんねえ。行くぞ諒助！！！」

「おう！！幼女のピンチだ！みなぎってきたああああああああああああああああ！！！！！」

俺たちは、声が聞こえる方へと走り出した。

「……………けてえ……………」

「……………すけてえ……………」

「……………たすけてえ……………!!!!」

徐々に大きくなってくる声は、俺たちが声の主に近づいている事を知らせてくれていたが、その一方で明らかに大変な事に巻き込まれている事を如実にしていた。

「はあはあ、そろそろ見えても良いくらいの近さまだ来たとも思うんだが……」

「こつちだ、嵬人!!俺のセンサーがこつちだと言っている!!!!」

「分かった。つたく、相手が女の時だけ、お前は頼もしいな。」

「まあな!!ほら、急ぐぞ、嵬人!!」

いつもの通りに諒助が並々ならぬ能力を発揮して、猛ダッシュで駆けっていく。

アイツ……色んな意味で妖怪っぽいな。

「そろそろ近いぞ!!」

「分かった!!」

こついう時の諒助の判断は確実だ。そろそろ見えてくるだろう。

「たすけてえ!!!!!!」

「いた!!」

諒助が指を指したところを見ると、一人の子供が走っていた。年齢的に、大体4、5歳つてところだろう。その子は泣きながら、必死に走っていた。見た所、何かに追われているようだが…

「一体、何から逃げてるんだ？」

「そんなことはどうでもいい!!今、行くぞ!!!!」

「あつ、この馬鹿!!!!」

何の躊躇いもなく飛び出していく諒助。アイツ、状況も読まずに…危険だぞ!!?

「こつちだ!!こつちに来い!!」

「!!!!??助けてえ!!!!」

此方に気がついた子供が一目散に此方にやって来る。

「怖かったよお。」

「よしよし、もう大丈夫だよ。お兄さん達がいるからね?」

「う、うん…グスッ、グスッ。」

諒助にしがみ付きながら諒助の胸に顔を埋める子供…
諒助の奴、顔が気持ち悪いほどニヤケてやがる…キメエ

「で、どうしたの？何があつたの？」

「あ、あそんでらね、みんなとはなれっちゃって、そ、そしたら、よ、ようかいが…」

「妖怪？」

「う、うん。ようかいがわたしをおいかけきて、にげてたの…グスツ、こわかったよ」

「よしよし、怖かったね。でも、もう大丈夫だよ、お兄さん達が助けてあげるから。」

「う、うん。」

妖怪だと？…ホントに居たのか…

まずいな…この様子だと早く逃げた方が良さそうだ。

「おい、諒助。この子を背負え。ここから早く、逃げるぞ。」

「了解。ねえ、君。名前はなんていうんだい？」

「み、みささぎ あかねだよ。」

「そう、可愛い名前だね、あかねちゃん。それじゃあ、あかねちゃん、僕の背中に乗ってくれる？」

「わかった、お兄ちゃん。」

「お、お兄ちゃん…」

「おら、この馬鹿トリップしてる暇なんかねえよ。ほら、行くぞ！
！！」

「分か「おお、こんなところにいたのか、探したぞお」なっ
！？」

いきなり聞こえた声。追いつかれたか！！

そう思い振り返ると…

「チツ！！遅かつ…こ、これは…」

「うん？人間が増えてる？ぐはははは、今日の俺様はついてるのお
ゝ！！」

豊かな髪の毛。ぼうぼうのあごひげをはやした大きな頭。ふくらんだ腹と強靱な肉体。肌は暗緑色の一色であり、身長は軽く二メートルは超すだろう。

そこには、妖怪が居た。

俺の頭が、生き物としての警告を鳴らす。逃げろ！！と。

「つく！！諒助、その子連れて早く逃げろ！！」

ここで三人一緒に逃げるのは危険だ。障害物は竹のみ。この妖怪には何の障害にもならないだろう。だとしたら、俺が足止めをして、この二人を逃がした方が命が救える可能性は高い。

「傭人、お前は！？」

「後から、追う！！早く行け！！！」

「ッ！！分かった！！！」

ダッダッダッダッダッ

さすが、諒助だな。長年親友をやっていただけ俺の考えが分かっているぜ…

「さて、悪いがアイツらは逃がさせてもらっぜ。妖怪さんよ。」

「ふん、たかが人間一匹に何が出来る？それに、見た所、靈力も神力もない。ただの人間じゃないか。ほれ、足も震えておる。」

そりゃ、そうだ。相手は、優に俺の二倍近くの大きさだ。しかも、筋肉ムキムキ。殴られてたら一発だろうな。相対する”死”。怖いなんてもんじゃない。早く、ここから逃げ出したい。

怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い
怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い
怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い
怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い

「でもよ……俺は……もう二度と……大切な奴を失うわけにはいかな」「死
ない。」ガッ！……！

妖怪が無造作に振るった腕が俺を吹き飛ばす。

まるで車がぶつかった様な衝撃が俺を貫き、まるでボールのように吹っ飛んだ。

「ガハッ!!!」

口から大量に血が出る。あの野郎……セリフぐらい言わせるよな。

既に咄嗟に庇つた右手の感覚がない。さつき、口から血を吐いたから、恐らく内臓のどこかがやられてるんだろぅなあ。

こりゃ、死んだな。

「ふん、話が長いんじゃないよ。お主みたいな奴を喰っても美味くはないだろう。やっぱり、人間の肉は幼子の柔肉が一番美味い。」

そう言うつと妖怪は走っている諒助達に手を向ける。

「くくくく、幾ら逃げようとわしからは逃げらぬよ。」

妖怪の手に黒い光が灯りだす。

「死ね。」

……ろ

直観だった。

…めろ

あの光は後一瞬で完成し、諒助達に向かうだろう。そうすれば、容赦なく諒助達は死ぬ。そう思った。

やめろ

体を動かそうとも既に俺の体は動かない。既に肉体は死んでいるんだろう。

やめろっ

「……………夫か!？」

何故だか視界が真っ赤に染まる。既にボヤけている俺の視界には、それはとても美しい鳥の形に見えた。そう、まるで不死鳥^{フェニックス}。俺を助けるように現れたそれは、妖怪に突っ込むと一瞬で妖怪を燃やしていた。

「き……れい……………だ。」

そこで俺の意識は途切れた。

第6話 邂逅（後書き）

初めての戦闘シーン！！

：主人公糞弱ツ！！台詞すらまともに言えないなんて：なんて軟弱なんだろうか…

てか、大抵ああいう台詞言う奴ってやられますよね（笑）主人公だけドｗｗｗｗ

そして、急いで書いたためすごく変な感じがビンビンです…

間違ってるどころや変なところ、表現が違ふところなどあったらバシバシ言っして下さい！！よろしく願います！！m（――）m

余談

やっと、紅魔郷ノーマルクリア出来たお！！

第7話 人里の守護者（前書き）

にじファンよ！！私は帰ってきた！！

と、どこぞのMSの人のセリフを言ってみたのですが、約二ヶ月ぶりの更新でした。本当に申し訳ありません・・・

これから段々と落ちてきてきたので、更新は一ヶ月に一回のカメ更新になると思います。

てか、余程の事が無い限りに一ヶ月に一回更新するので、これからもなにとぞよろしくお願いします。

・何故か削除してしまっていたので、もう一度投稿しておきます。
・何故消したし・・・

第7話 人里の守護者

「つぐす、う、うう」

「おら、はやくはなせよ!!おれたちが、みつけたんだぜ?それは、おれたちのもんだぞ!!」

「そうだ、そうだ!!おれたちのおもちやをとるなよ!!」

「こ、このこはおもちやじゃない!!このこをいじめるなよ!!」

「いいからはなせよ!!このつ!!」

「ぜ、ぜつたいはなすもんか!!」

「ちっ、みんなやっちまおうぜ。はなさないこいつがわるいんだからさ。」

「おら、はなせよ!!」

ドカツ

バキ

ボコ

「こいつ、しつこいぞ・・・」

「はあ、はあ、しんでもはなすもんか。」

「う、うるせえー!」

「やめなさい。それいじょうやると、おこるわよ。」

「げ、ぼつりよくおんなだ!に、にげろー!」

・・・・・・・・

「まったく。だれが、ぼつりよくおんなよ。わたしは、ぼつりよくはふるってないわよ。」

「・・・みつちゃん?」

「そうよ、ほら、たてる?」

「う、うん。」

「まったく、あんたもこりないわね。あんたはよわいくせに、けんかなんてするんじゃないわよ。またぼこぼこにされてるじゃない。」

「べ、べつにけんかしてたわけじゃないよ・・・」

「まさか・・・あんたまた、よけいなことにくびをつつこんだの?」

「だ、だって！このこがいじめられてたから・・・」

「はあく、あんたはまた、むだにせいぎかんをはつきしちゃったわけね。ま、それでこそあんたらしいんだけど。」

「せいぎかんってなに？」

「べつになんでもないわよ。それより、そのこはだいじょうぶなの？」

「そうだった！！・・・だいじょうぶ？あつ！！」

「・・・にげちゃったわね、あのこ。」

「うん。でも、げんきだったからそれでいいんだ。」

「そう・・・」

「うん。あ、みっちゃん、たすけてくれてありがとね。」

「べつに、きにしなくてもいいわよ。いつものことじゃない。・・・あ、でも、あんた、このあとそうじ、てつだいなさいよ？」

「うん、わかったよ、みっちゃん。」

「ならいいわ。」

「・・・」

「・・・」

「きれなゆうひね。」

「うん、いつまでもみていたいぐらいきれいだね、みっちゃん。」

「そうね。」

「このままじかんがとつまっちゃえばいいのに。」

「そうかしら？こういうのは、やっぱりずっとつづかないからきれいとおもわないのかしら？」

「そうなのかな？でも、やっぱりじかんがとつまっちゃえばいいとおもうんだ。そうすれば、ゆうひもずっとみれるし、みっちゃんとずっといれる。だから、じかんがとまればいいとおもうんだ。みっちゃんはおもわないの？」

「おもわないわね。だって、じかんがとまるとおおきくなれないじゃない。」

「みっちゃんは、はやくおとなになりたいの？」

「おとなにはなりたくないけど、はやくおおきくはなりたいわね。あんたはおもわないの？」

「・・・ぼくは、たのしいときをずっといたい。それができるなら、おおきくならなくてもいいかな。」

「ふん・・・」

「・・・」

「・・・」

「そろそろ、かえりましょうか。くらくなっちゃうわ。」

「そうだね。かえろっか、みっちゃん。」

「・・・まちなさい。」

「?どうしたの?みっちゃん。」

「わたしは、これからずっとあんたのそばにいるわ。おおきくなつて、おとなになつても。」

「・・・うん!!みっちゃん、だいすき!!!」

目を覚ますと知らない女性が居た。

「おや?ようやく、目を覚ましたか。」

目を覚ますと美女が居た目を覚ますと美女が居た大事な事だから二回言つたが今までに俺はこんな経験などしたはずがなく呆気にとられて思わず元の世界のモデルが足元にも及ばないレベルの美女を見ながらそういえば此処の世界に来て出合った人たち全員美女、美少女でありこの世界にはなんか美女成分が元の世界より絶対多めに

含まれてるよなとか、思った（ここまで約0・5秒）がとりあえずなんか言わなければいけないと思い、俺の口から飛び出した言葉は、

「・・・・・・・・・・すごく・・・・美しいです。」

「ッ!？」

阿部さんだった。

正直、これはどうなんだろう？ 諒助と付き合いはじめて、いろんな事をあいつから教わったのだが、このセリフは確か、おホモ達に使う言葉だったはず。

てか、スツゲエ恥ずかしい!! 自分でものすごい勢いで顔が熱くなってくるのがわかる。

俺の顔を覗き込んでいた女性は、俺の言葉にポカンとし、固まってしまった。

これはイケナイと思い、フォローしようとするが、

「あ、いえ、これは、その・・・そうッ!! あなたのその長くて綺麗な蒼い髪のことであって!! いや、あなた自身もとても綺麗であって、思わず見とれてしまったものであり、」

アホな俺は何故か墓穴を掘るばかりのセリフを連発。誰か早く俺を止めてくれと神に頼むが、普段から神など信じていないからだろうか、そんな奴は現れず、このまま永遠と続きそうな俺のセリフを止めたのは女性の笑い声だった。

「・・・・・・・・・・あははははは!! わかった、わかった!! 君の気持ちは十分わかったから、落ち着きなさい。」

そう言って、爆笑していた女性は、目尻に涙を浮かべながらも俺に

冷たいタオルを手渡してくれた。

「す、すみません。」

手渡されたタオルで、さっきの今までの人生でトップの恥ずかしいセリフ＋女性に爆笑されたことで最早熱45度を越すんじゃないかと思うほど熱くなった顔を冷やしながら、女性に謝った。

「気にしないでくれ、別に謝らなくてもいいよ。褒められて悪い気はしないからね。ただ、ちよつと褒められすぎて笑ってしまつてね・・・こちらこそ、すまなかつた。」

さっきは爆笑されてしまっていたが、それはあくまで上品な笑い方であり、しかもわざわざ爆笑してしまつた事についても謝ってくれている。恐らくは、常識のある良い人なのであるう。そう思うと自然と顔の熱さも消えていった。

「いや、そちらの方こそ気にしないでください。っと、そういえば助けて・・・貰つたんですよね？どうもありがとうございました。」

段々と冷静になり、周りを見渡してみると、どうやら一軒家のように、俺が寝ていたのであろう布団と、水が入っている入れ物、それに掛かっている幾つ物タオルがあつた。状況からして、俺はこの女性に助けてもらったようなので、お礼を述べておく。

「いやいや、当然の事したまふだよ。それに助けたのは私ではなく、妹紅さ。」

「妹紅さん？」

「そうだ。知らないのか？迷いの竹林の案内人として有名なはずだと思ふのだが・・・君も人里に住んでいるんだろう？」

何を言ってるんだい？とばかりに不思議そうな顔で俺を見てくる女性だが、生憎俺は迷いの竹林なんて知らないし、人里にもすんでいないし、妹紅って人も知らない。

ってな事で、俺は正直に答えておく。諒助とかは、相手がここまでレベルの女性だ。調子に乗って、知ったかをしるはずだ。だが、俺はそんな事しない！！結局、後々嘘がばれて取り返しの付かないことになるんだ。実体験を見たことのある俺は、ソレをよく知ってるからな。

「すみません、知らないです。俺、実は最近此処に来たもので、何も知らないんです。」

「最近此処に来た？・・・ああ！！君は外人か！！」

その言葉で納得がいったつとばかりな顔をする女性。ガイライジンって何だ？・・・そういえば博麗も言っていたな、俺達のことをガイライジンって。多分、言葉からしてこの世界の住人じゃない奴のことを示すんじゃないか？。恐らくは、”外”から”来”た”人”ってなことで、外人人って呼ぶのだろう。

「はい、俺は外人人なんです。だから、此処のことは全然知らなくて・・・」

「そうか・・・確かに君のその奇抜な格好は見ないからな。」

「いや、あなたも十分奇抜な格好してますけどね。普通、高校の制服みたいな物と、なんだか凄い形・・・五角形？の帽子に紅葉のような形をしたヒラヒラした物つけている人もそうそう居ませんよ。」

と、いうツツコミは心の中でしておく。流石に、女性、しかもとてもなく綺麗な女性にそういうことは言わない。諒助ではないが、

そういうのはキチンと弁えてる。てか、此処の世界の人はよくよく考えてみれば、皆凄いい格好してるよな・・・博麗は脇が見えてる巫女服だったし、八雲さんはヨーロツパ辺りの昔の貴族の御婦人が着てそうな服だったし・・・

まあ、全員が全員、似合ってから、ツツコマナかったけど。此処の世界の人たちは、美しい分、ファッションセンスが壊滅的なのである。そういえば、ある漫画の主人公が言ってたな、「人は何かを得るためには、何かを犠牲にしなければならない。」とか、なんとか。あれか？美しさを得る為に、ファッションセンスを犠牲にするのか？

つと、なんか思考が九十度ずれたな。

いかん・・・どこか諒助に毒されてる気分だ・・・
とりあえず気を取り直し、女性との会話に集中しよう。

「なら、君は私のことも知らなのではないか？」

「ええ、すみませんが・・・」

「いや、謝るのは私の方だな。君が人里の住民とばかりに思っていて、自己紹介もせずにはいたとは・・・君の服を見れば、君が外人人であろう事はすぐに分かったのだろうが・・・すまない。」

この人メツチャクチャ律儀だな。こういう人が俺の好みなんだよなあ。

つて、やヴあい。また諒助並の思考に陥っている！？

本格的に俺は毒されてるな、とか全然関係ないことを思いながら話を進める。

「別に全然気にしてないんで、良いですよ。」

「そうか・・・なら、良かった。私の名前は、かみしらさわ上白沢 けいね慧音だ。よろしく。」

「俺の名前は、瀬尾 寛人。こちらこそ、よろしく。」

これが、俺と里の守護者である上白沢 慧音との出会いだった。

第7話 人里の守護者（後書き）

と、第7話でした。

正直に言うと今回の話で嵬人に対するの印象が変わったかもしれないが、元からこういうキャラなのでご勘弁してください。

今回の話しは、タイトル名のごとくけーねとの出会いだったのですが、諒助たちは一切出てきませんでした・・・嵬人とけーねオンリーですみません。

嵬人が何で諒助のことを心配しないの？とか、あいつら何しての？ってことは次話で出てくるんでよろしくお願いします。

*蛇足

作者も東方の新作である 東方神霊廟 の体験版をつい最近プレイしたのですが、まさか一面ボスが幽々子様だとは思いませんでした
wwww

六面ボスのであった幽々子様が一面ボスって・・・今回の六面ボスが非常に気になりましたww

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7784p/>

東方捜真遊 ~ Volost of a true fantasy ~

2011年6月16日11時08分発行